



2025年5月25日発行(季刊)

認定 NPO 法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒160-0021 新宿区歌舞伎町 2-19-13 ASK ビル 501
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202
E-mail npo@hitomachi.org
URL : <http://www.hitomachi.org>
郵便振替口座 00170-6-410791 NPO 法人市民シンクタンクひと・まち社

おひとり様暮らし事始め～サ高住、暮らしてみたら

市民シンクタンクひと・まち社理事 木下 伸子

サ高住に入居をしたが・・・

5年ほど前に、これからの人生、あまり家族に負担をかけたくないというサ高住(サービス付き高齢者住宅)に入居した顛末を、本機関紙に寄稿してから、4年。自分が考えていた住まいとは違うと思うことがあり、元の家のすぐ近くのURの賃貸に、住み替えた。

大手ハウスメーカーがつくった建物は、ハード面ではほぼ言うことなし、設備面で高齢者向きとしてはどうかという点もあるが、まあ安心して住めるものであった。昼間は年中無休でフロントに職員がおり、生活相談、毎日の安否確認、急病やケガなどに緊急対応してくれることになっている。家賃とは別に要介護度5のサービスの1割負担以上のサービス料は安くないが、いざというときの安心料と思えばいいかと思っていた...

トラブル発生をきっかけに見えてきた課題と退去の決断

この建物だけ夜中に停電したことがあり、原因がわからず、警備会社の緊急ボタンを押したが応答なく、携帯で連絡したら20分後位に職員が駆けつけてきた。聞くと、緊急ボタンは停電で稼働しないそうだ、日ごろの連絡はPCでしているとのこと。—PCだって停電では稼働しないでしょ—大きな地震があっても安否確認は翌日、職員が出動してから。建物は無事でも、慌てて転んだり、家具が倒れたりしないとも限らないのに。

食堂の席は自由席、トラブルがあっても「席は自由席、ご理解を」のビラ掲示のみ。省エネが叫ばれているのに、24時間、共有部分の灯り、空調はつけっぱなし等々、担当者に意見を言っても対応がない。建物は良くても高齢者の心理や行動パターンについて、ほとんど理解がないと分かったので、ここに住み続ける意味がないと立ち退いた次第。

もし私がサ高住の大家だったらと考えてみた

○ハード面では、屋上を活用し各階の共有ベランダに置かれている共用分のエアコンの室外機の屋上設置による環境美化と、太陽光パネルを設置による省エネに推進。

○内線電話の設置と、外出ボタンのセンサーによる自動化。毎日の安否確認は外線電話のため、食堂との連絡手段がない。外出

ボタンの自動化は住人のボタン押し忘れのストレスから開放するため。建物内一斉放送設備も欲しい。災害時等は、各戸に連絡して回るのは初動行動が遅れてしまう。

○建物内コミュニティを作る。一人静かに暮らしたい住人も少なくないだろうが、社会と断絶したら、認知症になるともいわれている。デイサービスなどの利用もいいが、この中で、クラブ活動があってもいいのではないか。麻雀や囲碁など趣味の道具を備えて、きっかけづくりをすれば、自分たちで、支度・片付けもして、認知症予防にもなるし、また趣味が共通だった事がわかって新しいクラブ誕生等・・・学生時代のノリで、できそう。

無理にコミュニティに参加させる必要はないが、話すきっかけもなく、結構寂しいと思っている人もおり、きっかけづくりはしてみたい。

介護保険制度とサ高住

ここに書いた私の体験は一例で、きちんとされているサ高住も少なくないだろう。しかし、ここ数年、介護保険の改悪が、大きな問題となってきている。今回は、ことに、訪問介護事業の報酬が引き下げられたこと。その理由に、サ高住の中にある事業所が大きく黒字になっているからと聞いた。地域の単独で運営している訪問サービス事業所のヘルパーとサ高住併設の事業所のヘルパーとでは、労働環境がまったく違う。同じ建物内か近接されている事業所から利用者を訪問するのと、単独の事業所から自転車などで時間をかけて訪問してサービスにあたるヘルパーもいる。人材不足の業界で、何を標準に考えるのか?介護保険制度を運営する国や一部の事業所にとって標準にされることのないよう願っている。

多様な高齢者の住環境の選択肢が狭まることのないよう、増え続けるサ高住の大家さんには、高齢者について勉強してほしいと思っている。

(※この文は 認定 NPO の WAN (<http://wan.or.jp>) のエッセイ欄に、3回連続で掲載されてものをリライトしたものです)

